

二次元から三次元への飛翔

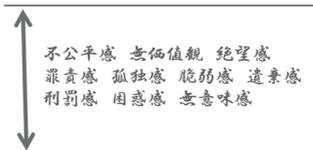
希死念慮を伴うスピリチュアルペインを発症した症例のスピリチュアルケア ～スピリチュアルケアにおけるロゴセラピー適用の可能性～¹

佐藤真彬

* スピリチュアルペインの概要

悪性腫瘍終末期においては全人的苦痛の緩和が課題となる。全人的苦痛は身体的苦痛、心理的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルペインに分類される。この中でスピリチュアルペインは「自己存在と意味の消滅から生じる苦痛」¹⁾と定義される。そして病、老、死、挫折といった人生の危機は人間がもつ「理想」と「現実」に乖離を生み出しそこからスピリチュアルペインが生じると言われている²⁾。たとえば自分が100歳まで生きるという「理想」を持っていて75歳で癌を発症した場合、病による死のリスクが人生の危機（現実）にあたり、100歳までの生存が難しくなることで「理想」と「現実」の乖離が現れる。そこから不公平感、無価値観、絶望感、罪責感、孤独感、脆弱感、遺棄感、刑罰感、困惑感、無意味感が出現して言動・行動に影響を与える（図1）。もう少し、言い換えてみると、自分らしさを構成する思い込み（理想）が人生の危機で崩れた時に思い込み（理想）と現実の間に乖離が出現する。すると無意味感などの辛い感情が出現して、それに伴って心理状態が変化してしまい、苦痛に影響された言動・行動をとるようになる。その苦痛に囚われることで「外に向けられ

理想



現実

(村田久行, 研修Aコース内容より抜粋して一部改変)
(川上明, 洛和会病院医学雑誌Vol22:37p40,2011より抜粋して改変)

図 1